

[特別活動]

子どもたちが自治的活動を行う姿を求めて

- 「7つの習慣」を意識した取組を柱にして-

高橋 健一*

1 研究の動機

子どもたちが、これから生きていかなければならない社会は、変化が激しく、複雑な人間関係の中で新しい未知の課題に試行錯誤しながら対応することが求められる難しい社会である。そのような社会において、体系化された生き方の指針をもち、よりよい生き方を選択し、実践していくことができる子どもたちを育てることが、教育現場の使命である。

スティーブン・R・コヴィー氏は、「7つの習慣は、つながりのない断片的な行動規範ではない。それは正しい原則に基づいた順序だった、極めて総合的な、私たちの生活や人間関係の効果を向上させるアプローチである。この7つの習慣を身につけることにより、次第に依存から自立へ、そして自立から相互依存へと成長していく」と述べている。

「7つの習慣」とは【○スティーブン・R・コヴィー著「7つの習慣」 ☆ショーン・コヴィー著「7つの習慣ティーンズ」から引用】

○主体性を発揮する	= ☆主体的に行動する (自分のやることに責任を持つという原則)
○目的を持って始める	= ☆目的を持って始める (自分の使命と目標をはっきりさせるという原則)
○大切なものを大切に	= ☆一番大切なものを優先する (優先順位づけの原則)
○Win-Winを考える	= ☆Win-Winの考え方 (相手も勝ち、自分も勝つという原則)
○理解してから理解される	= ☆まず相手を理解してから、次に自分が理解される (人の話を誠実に聞くコミュニケーションの原則)
○相乗効果を発揮する	= ☆相乗効果 (創造的な協力の原則)
○刃を研ぐ	= ☆自分を磨く (定期的自己リニューアルの原則)

私は、千葉県で小学生に7つの習慣を指導されてきた渡邊尚久氏に感銘を受け、様々な機会を通じて学んできた。7つの習慣は、体系化された生き方の指針となりうるものである。教育現場で7つの習慣を指導する意義は、子どもたちの中に物事を判断する普遍的基準を作り、自分たちの生き方を真剣に考え、よりよい生き方を実践する態度を育てることにあると考える。

特別活動の目標の改善として、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることをより一層明確にするために、「人間関係」という言葉が、道徳的実践の指導の充実を図る観点から、「自己の生き方について考えを深め、自己を生かす能力を養う」という言葉が加えられた。その目標を達成するために、子どもたちがよりよい生き方の指針となる7つの習慣を学び、望ましい集団活動に取り組んでいくことは意義があるであろう。また、学級経営の対策、防止、開発の視点から見ても、子どもたちが7つの習慣を学ぶことで、担任は、より開発を推し進めることができ、子どもたちの自由な発想の中から創造される活動の中で、友情を確かめ合い、学級の絆が深まるであろう。

渡邊実践では、総合的な学習の時間の中で、小学校高学年を対象に、1年間を見通した時期や状況に合った習慣についての授業や活動を行い、それに伴う書く作業を行っている。「7つの習慣 小学校実践記」には、子どもたちが7つの習慣を学び、人生について深く考え、日常生活に生かそうとする言葉や姿が多く記されている。私は、渡邊実践を基にして、小学校中学年に7つの習慣を指導したいと考えた。高学年は、頭の中で抽象的概念を駆使し、論理的な思考をする中で指導することが可能であるが、中学年には、自分の言動が7つの習慣とどう結び付くのかを実感する機会を教師が意図的に設定し、具体的な集団活動を中心として指導することが有効ではないかと考えた。つまり、特別活動の「なすことによって学ぶ」という方法原理を構えとして取り組む。

* 妙高市立妙高高原南小学校

2 児童の実態と主題への迫り方

現任教は、全校児童が100人に満たず、各学年単学級である。幼少期からの慣れ親しんだ人間関係の中で、子どもたちは、安定した学校生活を送っている。一方で、安定しているが故に、子どもたちが主体性、社会性を発揮しなくても暗黙の了解で活動が行われてしまい、自分から行動する姿や協力して活動を成功させる姿が見られにくい。将来、学校の中心として活躍する高学年としての姿を具現化するためには、中学年から集団活動の中で、自分から行動する大切さや協力して活動を成功させるすばらしさを実感する機会を設定する必要がある。

担任している3年生は、中学年らしく元気一杯で溢れんばかりのパワーがある。しかし、失敗を恐れるあまり、主体的になれなかったり、自己中心的に陥り、協力できなかったりと課題もある。1学期の学期じまい会では、ドッジボール、お絵かき活動、もの作り活動を楽しんではいたものの、まとめ役の子どもの話を最後まで聞けなかったり、次に何をするのかを考えずに無駄に時間を使ってしまったり、自分の都合を優先してスムーズに交代しなかったりなど、学級としてまとまりきれない子どもたちの姿が見られた。お互いのよさを認め合うことやお互いの意見を尊重し合うことの大切さを実感する機会を設定する必要性を強く感じた。

集団活動の発達的な特質を考えた場合、3年生はそれぞれの集団での活動目標について、ある程度共通に理解して持続して活動することができるが、まだ、個人的な興味、関心や他人からの要求に動かされることが多く、その集団に所属する成員の間にはっきりとした相互依存の関係は見られないとされている。相互依存の関係とは、自分の努力と他人の努力を引き合わせて最大の成果を出す意味であると考えられる。

2学期に行う本研究では、3年生の発達的特質を考え合わせ、子どもたちが小集団で出店を運営して、秋祭りを楽しむという学級イベントとそれに伴う話し合い活動を設定する。教師が意図的に計画、準備、運営する機会を設定し、7つの習慣を実践しやすいように工夫する。それらの機会で見られた7つの習慣に結び付く言動を学級掲示にすることで、子どもたちへの浸透を促したい。また、それを毎日のいいところ探し、定期的な振り返りの観点として活用していく。このように活動を展開することで、子どもたちが7つの習慣を意識して実践する自信を深めるとともに、自分から行動する姿、協力して活動を成功させる姿を求めることができるのではないかと考える。

3 研究の目的

本研究では、7つの習慣を意識しながら「学級イベント活動」「話し合い活動」「相互評価」に取り組むことによって、3年生の子どもたちが7つの習慣を意識して実践する自信を深めることと、①何から先にすべきか計画を立て自分から行動する姿、②お互いの意見を尊重し仲間と協力して活動を成功させる姿、①②を継続して活動に取り組む姿を求めていく。

4 研究の内容・手立て

研究の目的に迫り、7つの習慣を意識した手立てを以下のように講じ、その有効性を探る。

(1) 「学級イベント活動」

学級で協力して、「秋祭り」の計画、準備、運営を行うこととする。また、学級の名称「ケスミー」を加え、2学期の学級イベントを「ケスミー秋祭り」と命名する。1学期の学級イベントでまとまりきれなかった反省を生かし、教室内でそれぞれ工夫された店を出して、祭りを楽しめるようにする。授業時間の中で、出店の計画を立てる機会と「ケスミー秋祭り」で出店を運営する機会を設定する。しかし、出店の準備の時間は設定しない。準備は、業間休み、昼休み、下校までの時間で、子どもたちが主体的に行うこととする。

学級イベント活動では、計画、準備、運営のそれぞれの場面で、7つの習慣を実践する機会が多数あると考える。例えば、進んで出店の準備をする（主体性を発揮する）場面、計画をしっかりと立てて出店の準備に取り組む（目的をもって始める）場面、休み時間に遊びたいけれども出店の準備を優先する（大切なことを大切に）場面、困っている友達を手伝う（Win-Winを考える）場面、毎日コツコツと出店の準備をする（刃を研ぐ）場面などある。

【※ケスミー = ケ（ケンケン）…「明るく元気な」 ス（スーホ）…「仲良くいじめがない」

ミー（スイミー）…「力を合わせ、あきらめない」という子どもたちの願いから学級の名称となった。】

(2) 「話し合い活動」

「どんな店を出すか、だれがどの店を担当するか」という議題と、「出店を運営しながら、客としてどのように楽しむか」という議題を教師から提案する。

話し合い活動には、クラス会議の進め方を参考にして取り組む。①進行役は、立候補で決める。②「素早く、静かに、思いやりをもって」円を作り、椅子に座る。③1人ずつ友達や学級のいいところを発表する（アイスブレイキング）。④話し合い活動が複数の時間にまたがったときは、前時の意見と理由を振り返り、再度話し合う。⑤多数決は取らず、満場一致を目指す。

話し合い活動では、7つの習慣を実践する機会が多数あると考える。例えば、自分の意見を進んで発表する（主体性を発揮する）場面、友達の意見を聞いてから自分の意見を言う（理解してから理解される）場面、自分の意見も友達の見解も大切にして解決策を模索する（Win-Winを考える）場面、真剣に話し合った結果として満場一致でまとまる（相乗効果を発揮する）場面などである。

(3) 「相互評価」

① 「いいところ探し」…他己評価

1学期から日常的に「いいところ探し」を行ってきた。今回は、「ケスミー秋祭り」の計画、準備、運営の場面、話し合い活動の場面に限定して、友達のいいところを7つの習慣を意識して見つけ、「いいところあるさカード」を毎日贈り合う。カードの準備は教師が行い、名前をあらかじめ記しておく。各活動の前にくじのように子どもたちが引き、贈る相手が決まる。終学活に友達のいいところを書く時間と贈り合う時間を設定する。カードを贈り合うときは、友達のところに行き、面と向かって言葉で伝え、カードを渡す。カードの内容を教師が確認し、学級に掲示する。

② 「定期的な振り返り」…自己評価

7つそれぞれの習慣についてできているかを「とても言える」「まあまあ言える」「ふつう」「あまり言えない」「まったく言えない」の5段階で定期的に振り返る。

・1学期の「学期じまい会」 ・「ケスミー秋祭り」準備中盤 ・「ケスミー秋祭り」準備終盤

また、「ケスミー秋祭り」終了後に感想文を書き、計画、準備、運営について、自分の言動を振り返る。

5 取組の実際

本研究は、8月31日(月)～9月18日(金)までの約3週間で行った。学級イベント活動、話し合い活動、相互評価の3つの柱について、それぞれの実際と考察をまとめることとする。

(1) 学級イベント活動において

① 7つの習慣の紹介(8/31)

7つの習慣を3年生が理解するには、ただ紹介するだけでは不十分であると予想し、1学期の「学期じまい会」での子どもたちの言動と関連させて紹介した。

- 第1の習慣 …「自分から進んで発言したり、行動したりする」
- 第2の習慣 …「計画的に学級イベントの準備をする」
- 第3の習慣 …「自分のことより、学級のことを優先する」
- 第4の習慣 …「自分もO.K! 相手もO.K!」
- 第5の習慣 …「相手の話を聞いてから、自分の話をする」
- 第6の習慣 …「 $A+B=A \times B$ ではなく、 $A+B=C$ 」
- 第7の習慣 …「コツコツと学級イベントに向けて仕事をする」

例えば、第1の習慣では、「話し合いで進んで自分の意見を言えたか」「学級イベントの準備を進んでできたか」などが当てはまることを紹介した。特に、第4の習慣では、30秒間で相手に勝った分のお菓子がもらえるという条件で腕相撲大会を行った。お互いが一生懸命に勝とうとしたので、もらえるお菓子は1個もしくは0個であった。しかし、お互いに相手を勝たせようとするれば、自分も相手も10回も20回も勝つことができ、もらえるお菓子は増えることを示し、お互いのことを尊重することを指導した。第6の習慣では、「真剣に話し合って意見がまとまったとき」「協力して学級イベントが大成功したとき」などが当てはまると紹介した。

子どもたちは、初めて7つの習慣を知り、半信半疑な表情を浮かべていた。しかし、紹介を終えたあとは、7つの習慣を実践すべく、意欲に満ちていた。

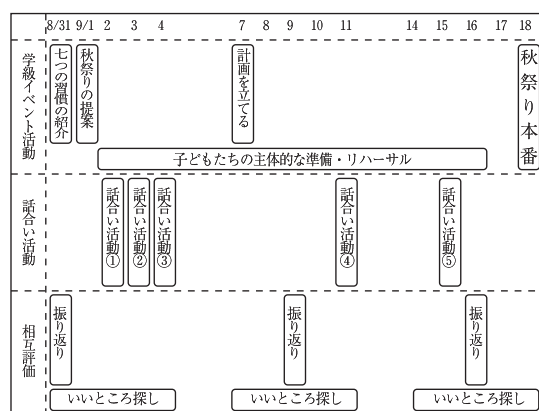


図1 7つの習慣を意識した取組の実際

子どもたちの感想から(一部抜粋)

- ・はじめは、「なんだろう」と思ったけど、7つの習かんを知ってすてきだなと思った。できなかったことは、がんばりたいです。
- ・はをとくとWin-Winができなかったから、2学きはがんばります。ほかも、もちろんがんばります。
- ・自分もO.K!相手もO.K!にしたい。話し合い活動でも人の話を聞く、聞いてから言いたいことは言っていきたい。
- ・ケスミー秋まつりをせいこうさせたいです。2学きは、じゅんぴをまに合わせたいです。

② 秋祭りの提案(9/1)

1学期の学級イベントの反省を生かし、前述した3年生の集団活動の発達的特質と9月は地域行事のお祭りの時期であることを考え合わせ、教師から小集団で出店を運営しながら楽しむ秋祭りを18日に行うことを提案した。子どもたちも「いいね〜!」と意欲的であり、学級として「秋祭りを成功させる」という目標設定がなされた。また、実施日を提示したことで、子どもたちはすぐにでも準備したいという意欲をもち、まだ出店も決めていないのに、何を準備しようかなど話題が聞かれた。

当校では、縦割り班で行う「ひまわりフェスティバル」という出店祭りが、毎年11月下旬の学校行事に位置づけられている。子どもたちにとって、「出店祭り」という活動はイメージがもちやすく、自治的活動を目指す学級イベントにふさわしい内容であったと考える。

③ 計画を立てる (9/7)

1学期の学級イベントでは、担当は決めたが、計画的ではなく、準備が不十分であった。4日の話合いで出店の担当が決まったことから、意図的に計画を立てる機会を設定した。

計画書には、出店の名前、メンバー、必要なもの、準備の計画（何を先にやるのか考える）を書き、計画通りにできたら○を付けるというものである。また、子どもたちの主体的な準備・リハーサルが成されることを期待して、「授業では準備の時間をとらないこと」「必ずリハーサルを行うこと」を話した。「前日には準備をしないこと」を話し、ギリギリになって焦ることのないように計画を立てることを指導した。

計画を立てる際も「ひまわりフェスティバル」の経験が生きており、自分たちの出店に何が 필요한のか、どのような準備をすればいいのかをイメージしやすかったようだ。自分たちで相談しながら、計画を立てることができた。計画を見ると、土日に友達の家集まって準備を行うというものも見られた。

秋祭りを成功させるために何をすればいいのかが明確になったことで、子どもたちの意欲がさらに増したのではないかと考える。

④ 子どもたちの主体的な準備・リハーサル (9/2~9/16)

話合い①②③で、正式に出店の担当が決まる前から、業間休み、昼休みを使った子どもたちの主体的な準備活動が見られた。最初の頃は、下校までの時間（月、水、金の約30分ほど）を活用することで準備に参加していた子どもたちもいたが、時間が経つにつれて、休み時間にほぼ全員で準備に取り組んでいた。自分の担当ではない出店の仕事を手伝ったり、アドバイスをしたりする子どもたちもいた。これは、学級として秋祭りを成功させたいという子どもたちの強い期待と意欲の表れだと考える。

しかし、全てが順風満帆というわけではなかった。子どもたち同士のトラブルも起こった。わたあめ屋（N児、H児、A児）では、誰がどの準備をするのかでもめて、N児が「学校に行きたくない」と家族に漏らしている」と、心配したH児の母親から電話があった。H児が仕事の割り振りを勝手に決めたため、N児は不平等感を感じたようだ。H児の母親から、「Nさんをリーダーにして不満を解消してほしい」と申し出があったが、私はあえてH児をリーダーとし、お互いに尊重すること（Win-Winを考えること）を指導したいと考えた。

まず、3人にどうしてトラブルになってしまったのかを考えさせた。3人ともが一生懸命に仕事をしたかったことを確認することができた。そこで教師からリーダーを決めることを提案した。すると、不平等感をもっているはずのN児がH児を推薦した。理由を聞いてみると、「私も一生懸命に仕事をしたかったけれど、Hさんもそうだったことが分かったから」と話した。A児もH児を推薦し、H児がリーダーとなった。「リーダーは全員に上手く仕事を割り振ることが必要である」ということを確認した。トラブルをきっかけにして、お互いを尊重することを学び、その後の準備は3人が満足するような仕事分担ができた。

⑤ 秋祭り本番 (9/18)

子どもたちが待ちに待った秋祭り本番である。開始の合図とともに、子どもたちは素早く出店の運営を始めた。話合い④⑤で決定した「出店の中で1人ずつ客として遊びに行く」というルールを守り、学級のまとまりを保つ中で子どもたちが楽しんでた。元気一杯の声で出店のアピールをする子ども、客を楽しませようと出店を工夫する子どもなど、本番の最中も子どもたちの創意工夫が発揮されていた。

学級として「秋祭りを成功させる」という共通の目標に向けて、今自分が何をすればいいのかを考えて行動できる子どもが多かった。また、全員で「秋祭りを成功させる」という強い意気込みが伝わってきた。それぞれの出店が繁盛していて、運営する子どもも満足し、客として遊んでいる子どもも満足している様子が見られた。

子どもたちの表情や言動が、「秋祭りは大成功した」「自分たちは相乗効果を発揮した」ことを物語っていた。

(2) 話合い活動において

① 「どんな出店を出すのか、だれがどの店を担当するか」(9/2, 3, 4)

話合い①では、子どもたちから「たこやき屋」「わたあめ屋」「やきそば屋」「いかやき屋」「しゃてき屋」「まとあて屋」「くじびき屋」「もぐらたたき屋」「わなげ屋」「ストローアーチェリー屋」が提案された。「どの出店を担当したいか」を、子どもたちが意思表示をしたところ、たこやき屋とわたあめ屋に希望が集中し、ストローアーチェリー屋、くじ引き屋を誰も希望しないなど、問題点が浮き彫りとなった。子どもたちも、このままでは納得できないと感じたところで、1回目の話合いが終了した。

話合い②では、出店の数が多く、1人で担当しなければならない出店があることに気付き、本当にやりたい出店は何か話し合うことになった。ストローアーチェリー屋、やきそば屋、いかやき屋は、希望者が0となったことから、今回は出店しないことになった。それでも、まだ希望者が1人の出店があり、「1人では大変だと思う」という意見が

目的をもって始める(計画できにじゅんびしよう！)

出店 たこやき屋

メンバー ひつよう安ものおりのみ・こうこく・たまごパンダ・わりはし

じゅんびの計画(何を先にやるのかを考えよう！)

計画通りにできたら○を付けよう！

7日(月)	計画を立てる	○
8日(火)	ソースを作る	○
9日(水)	香のりを作る	○
10日(木)	かつおいしを作る	×
11日(金)	ついにしらすを作る	○
12日(土)	かまぼこ(はな)を作る	○
13日(日)	なし	○
14日(月)	こいし	△
15日(火)	たこやき作ろう	△
16日(水)	たこやき作ろう	◎
本番	ケスミ秋祭り	◎

かならず、自分たちで出店リハーサルを行おう！

図2 秋祭りに向けての計画表(たこやき屋)

発表されると、希望者の少ない出店に男子が率先して移動していた。一方、「人数の多い出店から、少ない出店に移動すればいいと思います」と、移動を強要する意見も出された。食べもの屋にこだわる女子が強く抵抗した。全員が納得しなかったため、話し合いがまとまらなかった。

話し合い③では、教師から「我慢するのではなく、みんながO.K!になるよう工夫した意見がでるといいね」と話した。男子は、「Win-Winを考える」を意識して、率先して人数の少ない出店に移動していた。「もぐらたたき屋が2人では、もぐらを出す手の数が足りないのではないか」という意見が出された。また「人数の多い出店から、少ない出店に移動したほうがいい」と言う意見も根強くあったため、満場一致で意見をまとめるのは、不可能かと思われた。しかし、たこやき屋を希望していたT児が「もぐらたたき屋にたこやき屋からお手伝いに行けばいいと思います」という新しい意見を出した。この意見に全員が納得し、話し合いがまとまった。

話し合いで満場一致を目指したことで、葛藤場面が生まれた。その結果「A+B=C」となり、相乗効果を発揮することができた。

② 「出店を運営しながら、客としてどのように楽しむか」(9/11, 15)

話し合いの意図は、「出店を運営する人も必要であり、客となる人も必要であるが、どのように役割分担をするのか」というものである。

話し合い④では、子どもたちから「出店から1人ずつ客になる」「食べもの1つ、遊び1つの出店を開く」「遊び2つ、食べもの1つの出店を開く」「名簿順で客になる」「赤白順に客になる」が提案された。それぞれの意見の利点や疑問点が出されたが、「全部の出店が開いているほうがいい」という意見から、出店から1人ずつ客になる、名簿順で客になる、赤白順で客になるの3つの意見が残された。自分の意見に固執する様子も見られ、説得力のある意見が出されても、それをなかなか理解できない子どもがいた。

話し合い⑤では、アイスプレイングでは、休み時間に学級イベントの準備を優先している人(ほぼ全員)のことが話されていた。自分の意見に固執することなく、相手の意見を理解しようとする姿を求め、教師から「話し合いがまとまらなければ、ケスミー秋祭りは中止にする」という話をした。再度、自分たちの意見の利点を確認し合ったところ、出店から1人ずつ客になるでは、ほとんどが利点であったが、名簿順と赤白順では、出店の担当全員が客になってしまい、出店の運営ができないことが判明した。その状況においても、最後まで、名簿順の意見にこだわっていた子どももいたが、友達から「こだわる理由を教えてほしい」と意見され、それに上手く答えられなくなっていることを自覚して、制限時間ぎりぎり意見を変えた。そして、教室は子どもたちの歓喜の拍手に包まれた。

一生懸命に意見を出し合った結果、満場一致で意見がまとまり、秋祭り中止を回避できたことで、子どもたちは自信を深めた。

(3) 相互評価において

① いいところ探し(8/31~9/4 9/7~11 9/14~18 秋祭り後の日常活動で)

いいところあるさカードの記述を学級に掲示し、毎日蓄積することで、7つの習慣を意識していいところ探しができた。学級イベントの計画、準備では「計画を真剣に立てていたね」や「休み時間も準備していたね」や「出店のアイデアがいいね」などの記述が、話し合い活動では「勇気を出して意見を言っていたね」や「聞き方のルールを守って、友達の話聞いていたね」や「自分もO.K!相手もO.K!になったね」や「A+B=Cになったね」などの記述が、秋祭り前日には、「明日、がんばろうね」や「秋祭り成功させようね」などの記述が、当日の運営では、「秋祭り成功したね」「次もがんばろう」などの記述が見られた。

いいところ探しを継続したことは、子どもたちが自信を深めることと、自発的活動への意欲を継続させることに効果的であった。また、秋祭り後の日常活動でのいいところ探しでも7つの習慣と関連した記述が見られるようになってきた。

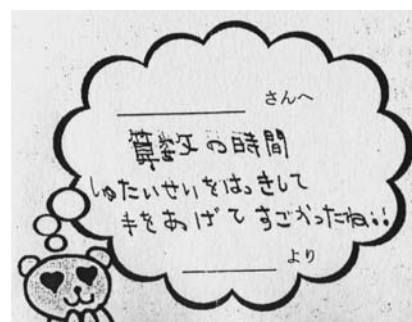


図3 7つの習慣と関連した記述

② 定期的な振り返り「学期じまい会」(8/31)「ケスミー秋祭り」の準備中盤(9/9)「ケスミー秋祭り」の準備終盤(9/16)

	まったく 言えない	あまり 言えない	ふつう	まあまあ 言える	とても 言える
第1の習慣			5	5	8
第2の習慣	1	2	3	7	5
第3の習慣		1	1	5	11
第4の習慣		2	1	9	6
第5の習慣		1	4	8	5
第6の習慣			2	9	7
第7の習慣	1	1	2	3	11

表1 第1回振り返りの結果 8/31→

	まったく 言えない	あまり 言えない	ふつう	まあまあ 言える	とても 言える
第1の習慣			2	4	12
第2の習慣			4	2	12
第3の習慣				2	16
第4の習慣			4	6	8
第5の習慣			1	4	13
第6の習慣			5	7	6
第7の習慣				4	14

表2 第2回振り返りの結果 9/9 →

	まったく 言えない	あまり 言えない	ふつう	まあまあ 言える	とても 言える
第1の習慣			1	2	15
第2の習慣				5	13
第3の習慣				4	14
第4の習慣				7	11
第5の習慣			2	4	12
第6の習慣			2	3	13
第7の習慣				3	15

表3 第3回振り返りの結果 9/16

1学期じまい会の振り返りでは、子どもたちが7つの習慣を実践できていないと感じていることが窺える。また、第2、第7の習慣の項目で、「まったく言えない」の項目を選択している子どもがいる。そこで、計画をしっかりと立てる機会を7日に設定した。しっかりと計画を立てることで、自分が何をするのか明確となり、休み時間にコツコツと準備することにつながると考えたからである。

準備中盤の振り返りでは、第2、第3、第7の習慣の項目で、子どもたちが自信を深めたことが窺える。また、満場一致を目指した話し合い活動①②③を通して、第1、第4、第5、第6の習慣を意識して実践する場があったことから、自信を深めたことが窺える。しかし、「ふつう」の項目を選択している子どもがいることから、特に第4、第6の習慣を意識して実践するために、さらなる満場一致を目指す話し合いを設定することが必要になると考え、11日に話し合い④を、15日に話し合い⑤を設定した。みんなが納得する話し合いができ、相乗効果を発揮できれば、自信が深まると考えたからである。

準備終盤の振り返りでは、満場一致の話し合いが達成されたことから、第4、第6の習慣の項目で、子どもたちが自信を深めたことが窺える。また、秋祭りが近づくにつれ、どの習慣においても少しずつ自信を深めていることが窺える。この結果を受けて、教師からは、子どもたちが秋祭り本番を大成功できるように、リハーサルを怠らないように声掛けをすることとした。

定期的な振り返りを行うことは、子どもたちが自分の言動を振り返り、自信を深める機会になるだけでなく、子どもたちの実態を把握することで、教師が意図的に機会を設定する材料として役立てることができた。

③ 「ケスミー秋祭り」終了後の感想文 (9/18)

秋祭りが大成功した感動を伝えたいという思いが、書くことに意欲的な子どもは240文字原稿用紙6枚、普段あまり書くことに意欲的でない子どもも1枚半を書くことにつながった。7つの習慣に関連させて、自分や友達のがんばったところやよかったところが、たくさん書かれていた。また、新たな学級イベント活動への意欲も書かれていた。

たこやき屋を担当したT児の感想から (一部抜粋)

…話し合いのときは、主体せいを発きできました。ふだんははずかしくて、手をあげられないけれど、言うことを整理して、ゆう気を出して言えてよかったです。…3年生のみんながきょう力して、工夫して、がんばっていたのでよかったです。これからがんばりたいことは、ケスミー冬まつりもして、秋まつりより10000倍以上、きょう力してがんばって、3年生みんなでせいこうさせたいです。

T児は、3年生になってこれまで授業中に発言をすることがほとんどなかった子どもである。今回の話し合い活動で主体性を発揮できたという自信をもったことで、教科の授業でも意欲的に発言する姿が見られるようになってきている。

6 考察

(1) 研究の成果

学級イベント活動、話し合い活動で見られた子どもたちの姿や相互評価で見られた子どもたちの記述の変容から、3年生の子どもたちに、具体的な集団活動を中心として、7つの習慣を指導することはとても有効であった。「ケスミー秋祭り」後の日常活動でも、7つの習慣を意識して「いいところ探し」が継続していることから、7つの習慣が3年生に浸透してきていることが窺える。

また、求めていた①何から先にすべきか計画を立て自分から行動する姿、②お互いの意見を尊重し仲間と協力して活動を成功させる姿、①②を継続して活動に取り組む姿を様々な取組で子どもたちが実践していた。教師が意図的に設定した機会の中だけではなく、子どもたちが自分たちの時間を使って、自分たちで行動し、協力して活動を大成功に導くことができた。まさに、子どもたちが自治的活動を行う姿を求めることができた。

(2) 研究の課題

渡邊実践との大きな違いは、教師の7つの習慣に対する理解の深さである。1年間を通して、7つの習慣の全ての要素を余すところなく伝えているのが渡邊実践であり、私の実践は、具体的な集団活動に合わせ、7つの習慣の要素の一部分を伝えたに過ぎない。さらに、7つの習慣に対する理解を深め、実践を深めていく必要がある。

また、本実践では、手探りの部分が多くあり、実施計画を立ててから進めることができなかった。子どもたちの実態やその学年で身に付けるべき力と7つの習慣との関連を整理して、指導モデルを考え出すなど、計画的に実践できるように工夫していきたい。短期的ではなく、学年を跨いだ長期的に継続した取組を生み出していきたい。

〈引用・参考文献〉

- 1) スティーブン・R・コヴィー 『7つの習慣』 キングベアー出版、1996年
- 2) ショーン・コヴィー 『7つの習慣ティーンズ』 キングベアー出版、2002年
- 3) 渡邊尚久 『7つの習慣 小学校実践記』 キングベアー出版、2005年
- 4) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 東洋館出版社、2008年